

経験が ビジネスでも生きる

送り出す当社も 協力隊の人材育成に期待

(インド事業グループ グループリーダー 金原優二さん)



RICOH
imagine. change.

RICOH(リコー)

世界約200の国と地域にネットワークを持つグローバル企業。オフィス向け画像機器、商用・産業用プリンティングなどを手がける。「多様な人材が活躍できる」考えのもと、社員一人ひとりが仕事と仕事以外の双方をマネジメントしながら、生産性の高い働き方を促す環境整備を進めている。

途上国で困難や逆境に立ち向かい活動する中で視野を広げ、ユニケーション力などが鍛えられていく。な視点を持つだけでなく、新しい試みを率先して実践するもある。企業は、そうした人物が“ビジネスに新しい風を吹き込

かき活動する中で視野を広げ、ユニケーション力などが鍛えられていく。な視点を持つだけでなく、新しい試みを率先して実践するもある。企業は、そうした人物が“ビジネスに新しい風を吹き込

過去 コミュニティ開発隊員として
キルギスへ

現在 復職後、インド事業管理と中央アジア・
コーカサス地方の新規ビジネスを開拓

竹田佳代(たけだ・かよ)さん
派遣期間：2014年10月～2016年9月

学生時代にフィリピンの孤児院を支援するNPOでボランティアに参加。リコー入社3年目に、ボランティア特別長期休暇制度を利用して青年海外協力隊に応募。帰国後は、新興国事業センターに配属され、17年からインド事業グループへ。

「応募時を思い出して一言!」
きっかけは 国際協力を挑戦したかった。キャリアアチェンジしたかった。
語学スキルは トルコの大学に留学。トルコ語と英語を学びました。
家族の反応は 「行っといで、僕らも旅行で訪ねるから」と応援。



昨年、キルギスには仕事で3度訪れた。写真はウオッカ工場の人たちと。

リコーには、会社に在籍したまま JICA 海外協力隊に参加できる「ボランティア特別長期休暇制度」がある。営業部で働いていた竹田佳代さんは、この制度を使って2014年にキルギスに赴任。復職後の現在は本社でインド事業を担当しながら、中央アジア・コーカサス地方の新規ビジネス開拓に取り組んでいる。上司の金原優二さんは、社員を協力隊に送り出す利点を次のように話す。「当社では今後も世界から評価される企業であり続けるにはSDGs(持続可能な開発目標)(40ページ参照)に貢献する事業への取り組みが重要と考えてきました。そのため私たちが求めるのは、現場で社会問題を掘り起こすことのできる人材であり、自社の技術力とビジネス力を使って事業を生み出すことのできる人材です。これらは協力隊活動の中で鍛えられる課題解決能力に相通じるとこ

ろがあると思っています」竹田さんは会社の適材適所という方針によって、18年からキルギスでも市場調査を始めている。そこで新たに気づかされることも多かった。「協力隊時代は、途上国で低所得者層に貢献するという先入観からか、『国の経済規模も小さいだろう』程度に考えていました。けれどもビジネスの視点で見ると、途上国といっても多様な人が暮らし、多様なニーズを秘めていることがわかってきたんです」たとえば都市部にはレストランが多く、メニューの印刷ニーズは想像以上にあった。お祝いの場で飲むことの多いウオッカは、毎月100種類以上の新製品が発売されるため、酒造メーカーはラベルの印刷経費に悩んでいた。さらにびやかで美しい絵柄を好む国民性から、自社の高い技術を生かせる手ごたえも感じたという。「長期休暇制度はこれまで約10名が利用しました。職場に戻ると生活環境が変化しますので大変だとは思いますが、協力隊は協力隊、仕事は仕事と両者を別ものと分けることなく、協力隊とビジネスの双方に精通した強みを生かして、自分らしい成果を上げてほしいと願っています」と金原さんは竹田さんにエールを送る。

メンバーとミーティングを行う薬師川さん(写真右)。会社には日本人3名とケニア人14名が在籍する。



過去 マーケティング隊員としてケニアへ

現在 協力隊時代の赴任地で起業し、
現在はボーダレスグループの一員に

グループの一員として ともにスピーディで インパクトの大きい社会貢献を

(ボーダレス・ジャパン副社長 鈴木雅剛さん)



BORDERLESS
BORDERLESS JAPAN
(ボーダレス・ジャパン)

「数ある社会問題を解決したい」と2007年に創業して事業を開始。17年、社会起業家がソーシャルインパクトの創出に専念できるプラットフォーム体制を強化するため、それぞれが独立した法人として自主経営を行うグループ会社制に移行。日本をはじめ、ケニア、バングラデシュ、ミャンマーなど世界各国で事業を展開する「グアテマラの手織物と刺繍を用いた製品を販売する「ILOITOO(イロイト)」もグループの一員で、元協力隊員が起業している。

「私たちボーダレス・ジャパンは、世界のさまざまな社会問題に対し、寄付金や助成金に頼らずソーシヤルビジネスで解決を図る企業です。『いい社会をつくりたい』という志のもと、22社の社会起業家たちが一つのコミュニティを形成しています」と話すのは、同社で副社長を務める鈴木雅剛さんだ。そして、その中に元協力隊の薬師川智子さんが起業した「アルファジリリミテッド」がある。2016年2月、薬師川さんはケニアのミゴリ県で任期を終えた直後に、同地で小規模農家の経営パートナーとして、契約栽培によ

る生産・卸売りのマネジメント事業を始めた。起業について彼女は、①新しいものを見出すエネルギー、②人を巻き込む力、③考えるだけでなく行動する力——この三つがあったからできたかと分析する。「これらは協力隊時代に誰もが求められるもの。実践するうちに、自身で道をつくることの楽しさを知りました」初めてのビジネスに苦労するも、農家や販売先と良好な関係を築いていった。しかし、悩みもあった。「事業資金は借りることができても、会社の仕組みや組織づくりはまだまだ。私の夢はミゴリ県だけの農家を豊かにするのではなく、『一刻も早く世界を変える!』と」起業から約1年半後、現状をよりよく変えるべくボーダレス・

「社会のために広がるアイデアがあっても世界に広がらなければ意味がありません。社会起業家おたがいに知見を持ち寄り、その知見をグループ全体で生かしてもらう——そうした『恩を送る』ことに似たシステムを構築して、社会課題を継続的かつスピーディに解決するビジネスを目指しています」

「社会を変えようとしているのは自分一人ではない。薬師川さんは多くの仲間がいることを心強く感じ、アフリカの大地で奮闘している。